



サンアントン大会で“日の丸”をフォーメーションで表現する日本チーム

イス・克蘭モンタナ大会」であった。

驚いたのは、“SAJ派遣公式視察団”が成田空港に集合した時。全国から集まった指導員はたったの“15人”。この8年間でのスキー人口の凋落ぶりを見事に現わしていた。

この大会のテーマは、インタースキー原点回帰の「スノースポーツの楽しさをどう伝えるか」で、日本は「スノースポーツの多様化に向けた指導と教師の在り方」を発表した。

興味・関心の、各国デモのフォーメーション。

日本のナショナルデモチームの滑りには、目を見張るような力強さがあつた。



克蘭モンタナ大会に北海道から参加の
吉田さん・藤島さん・杉山さん

8年前は、オーストリアチームとは「大分、力の差があるかなあ」と感じたが、今回の日本チームは、力強く、スピード感あふれる滑りを見せ、あえて硬い急斜面で急停止した。“J”の隊形で・・・。

技術的にも、スキー先進国の仲間入りを感じさせてくれた克蘭モンタナ大会であった。

インタースキーは、ローテーション技法やアールベルグ技法が競い合っていた1940年代後半、クルッケンハウザー教授が「一般のスキーヤーにどう教えたらよいかを話し合う場が必要」を提唱し、1951年第1回大会がオーストリア・ツールスで開催された。

しかし、2回・3回目となり当初望んでいた方向と違って、フランスとオーストリアの技術論争が長く続いた。が、1968年第8回アメリカ・アспен大会で「世界のスキーをひとつに」として、その論争にピリオドが打たれた。

その後、波乗り技法、環境保全、そして原点回帰の「スノースポーツの楽しさをどう伝えるか」と、その歴史を刻んできた。

このインタースキーの歴史は、“世界のスキーの現代史そのものである”と、「サンアントン・インタースキー公式報告書」にある。

僅か2回の参加ではあるが、一介の指導員として“スキーの現代史”の一頁に身を置き、その流れの一端を見ることができた貴重な体験であった。そこからスキーの歴史、世界の趨勢、日本の立ち位置、今後の展望など多くを学んだ。

これらによって、私のスキーの技術・指導は成長し豊かになった。

そんな“インタースキー”に感謝である。